

2014 県展 講評

1 絵画部門

【総 評】

全体的にレベルが高く、審査を繰り返すこととなった。現在は具象絵画がトレンドとなっており、今回の県展にもその傾向が反映されていた。抽象絵画の応募作もあったが、既視感のあるものが多かった。情報化社会のいま、何かの影響を受けないということも難しいのだが、より「自分らしさ」を出した新鮮な表現を期待する。

【部門大賞・知事賞】 《monkey》

「見ざる、言わざる、聞かざる」を描いた寓意的とも言える作品だが、内容以前にまず独特の色面の美しさで目をひきつける。いわば画面の表現力で「何が描かれているのだろう」というところまで見る者を引き込んでいく。意味内容は必ずしも明確ではなく、むしろ色々な想像をかき立ててくれる面白さがある。

【兵庫県立美術館賞】 《瞬きーその時の前にー》

出番を待つ場面であろうか、一瞬の緊張感や口もとの笑みなど、人物の表情がうまくとらえられている。おそらくわざと崩したであろう人体のバランスや、画面を覆う白の色調により、思春期の人物に特有の雰囲気うまく描出されている。

【神戸新聞社賞】 《約束を破ったあなたへ。》

イラスト的、マンガ的とも言える表現は近年多く見られるものだが、この作品は口もとや目もとに感情がよく出ており、絵画作品として魅力が感じられた。寒色の中に唇だけ暖色を置くなど、よく計算された画面づくりである。

【芸術文化協会賞】 《散髪屋さん》

団体展、コンクール展などでしばしば見られる描画様式の作品だが、力強くダイナミックでありつつも、ほのぼのとしたイメージで、純粹に引き寄せられる作品。全体としては重い色調の中に、さわやかな色づかいが見られる点も、新鮮である。

2 彫刻・立体部門

【総評】

出品点数が少ないが、大都市を擁し、芸術系の学校が点在する兵庫県の土地柄を反映し、高レベルで多様な表現が見られ、審査が楽しかった。各々の生活のバックグラウンドをきちんとふまえて、何かに縛られることなく、自由に伸び伸びと制作されている。また、長い時間をかけて独自の世界を探し出そうとしている方が多い。ただ、やや既視感があるので、もう少し自分の中に入り込んで作ってもよいのではないかと思う。

【部門大賞・知事賞】 《柔固》

全体をまとめる感性が優れている。技術と素材は日常的だが、その集積によって起こる存在感や発言力がある。それぞれのパーツが少しずつ異なることでゆらぎが生れ、面白い形を作り上げている。また、単色にすることで物質感がより強化され、触覚的な作品になっている。

【兵庫県立美術館賞】 《思考回路》

透明・半透明・ミラーなど素材を巧みに使い表現している。反射や色を取り入れるなど、空間の構成も面白い。材料と労力がかけられている力作。抽象表現が難しい時代に、それを恐れず、自分が好ましいと思うものを時代の風潮に合わせず作られている。

【神戸新聞社賞】 《再生—イカロスの墜落から2—》

イカロスの墜落を通して現代社会を批判するというメッセージを形にしきれていないが、造形的にまとめあげる力があり、魅力的な作品。彫刻は素材をうまく使うということが重要なので、足をブロンズで表現していれば重量感と存在感が生れていただろう。

【兵庫県芸術文化協会賞】 《峠の彼》

ある情景のワンシーンを、ひとつの完成された世界に作りあげている。テーブルの上で小さな世界を作る人は多いが、この作品は、ひとつひとつのパーツがよく作り込まれていて完成度が高い。また、モチーフのスケール感が自然で、想像力をかきたてられる。

3 工芸部門

【総 評】

兵庫県ならではの作品もあり面白いが、去年より質・量ともに低くなっていて残念である。どういう心で、何を目指してやっているのか、見る人に勇気を与えるような点を選定基準にした。多様な表現の生まれている現代において、工芸という範疇自体も曖昧になっており、募集の部門を分けることが難しくなっているのでは。工芸という長い歴史の中で、いかに新しいことに挑戦するかを考えてほしい。

【部門大賞・知事賞】 《SQUARE AND TRIANGLE》

わざわざ斫りをつくり、その穴に糸を通して装飾的にステッチしている。綴り、織りの技法を活かしていてユニーク。柔らかなぼかしも入り、テクスチャを活かした爽やかで好感の持てる作品。素材や技法の必然性がからまって出来上がっており、色・構成・内容のバランスも良い。

【兵庫県立美術館賞】 《素》

あまり見たことがない、シンプルかつ独創的で面白い作品。薄さや軽やかさを意図したことが伝わってくる。形の面白さや素材の扱い方が評価点になった。様々な使い方も考えられるので、プレゼンテーションの仕方を工夫するとより良いだろう。

【神戸新聞社賞】 《inflection point》

デザイン・技術ともに力が入っている作品である。手間がかかっていることが分かり、きちんと仕上がっている。視覚的面白さがある。動きがあり、目の錯覚を誘うような計算されたデザインが特徴的。

【芸術文化協会賞】 《刻》

技術がしっかりしていて、確実な仕事をしている。蝋染めにしかできない技法を使い、重ね染めをして濃淡・色彩をつけ、絵画的な表現に持っていつているが、絵画的な部分をどう捉えるかで4席に留まった。素材・技術を自分の中にとりこんでいかに見せるかという工芸としての強さを見せてほしい。

4 書部門

【総評】

応募数が大幅に減ったのが残念だ。漢字が特に少ない。ただ、数が減ったからといって、レベルが格段に落ちたということはなく、個々みれば高くなった部分もある。かな、漢字、前衛書、ほかの各ジャンルを3人で、投票形式と討議によって審査した。

【部門大賞・知事賞】 《初秋風》

近代的で明るい感覚がよい。かな作品に特有の連綿線をあえて強調しないことで、字の左右の横に流れる風を感じさせる。黒を集めた力が画面左上に向かって発展するというような全体の構成もよく練られている。

【兵庫県立美術館賞】 《MEI》

枠で囲むと広がりなくなるものなのだが、かすれ、飛沫等をうまく使って動きを出している。書的な要素を残した上で、近代的な絵画や彫刻にも通じる作品となっている。大賞作品同様明るい雰囲気漂っているのもよい。

【神戸新聞社賞】 《張籍詩》

4行で字数が多く一見うるさい印象があるが、行と行の干渉がよく、中心がよく通り墨の入り方もよいので見ごたえがある。同じ漢字でも形を変えるなど工夫されている。中国の古典をよく研究している。

【芸術文化協会賞】 《山の際に》

かなの常識からすると複雑な作品。漢字を入れるなどして新しさ、若々しさを出している。横に動かす字を入れることで密度が増している。かすれの線も絹本に書いたような暖かさがある。

5 写真部門

【総評】

昨年より応募数が増え、審査する側としては嬉しい悲鳴だった。多彩な傾向の作品が寄せられたが、人物のポートレートやスナップが比較的少ない印象もあった。背景としてプライバシーや肖像権をめぐる昨今の風潮があるのかもしれない。デジタル加工が普及したことで、写真という表現の意味があらためて問われているようにも感じた。今後デジタルならではの、今までに見たことがないような表現が出てくることを期待する。

【部門大賞・知事賞】 《ひまわり》

美しさと、美の中の醜とも言うべき側面とがひとつに結晶した、インパクトのある作品。絵画的な要素もあり、ひよっとするとデジタル加工も用いられているのかもしれないが、そういった「表現」の部分にセンスの良さが感じられた。テクニックも確かである。

【兵庫県立美術館賞】 《泡になるわたし》

瞳に泡が重なっているところが面白い。偶然に撮影されたようにも見えるが、肉眼で見える世界ではなく、既視感のある作品も多い中で、新鮮なイメージとして目を引いた。まだ若い作者ということで、これからを期待させる。

【神戸新聞社賞】 《雨の美術館にて》

構図が優れ、グレーの階調も美しく、モノクロ写真ならではの強さと魅力が感じられる。モノクロであることが、逆に新鮮さを感じさせる作品。

【芸術文化協会賞】 《フラミンゴの季節》

羽の上の水滴に映るフラミンゴの姿という着眼点が凄い。カラー作品だが、比較的抑制した色調で表現されており、センスの良さを感させる。

6 デザイン部門

【総 評】

デザインは問題に対する自分の意見を表明するものだが、この度の応募作品は自己表現に近いものが多く、全体的にメッセージ性が弱いようだ。また、デザインをどう捉えるかという姿勢も見え辛い。他部門にも該当する例があり、いかにもデザインという作品が少ない。タイトルもこちらに響くようなものがほしい。応募数も少なく残念、来年に期待したい。

【兵庫県立美術館賞】 《ペトルーシュカ（ムーア人と踊子、ペトルーシュカとその幽霊）》
緻密な描きこみがあり、絵の魅力を感じさせる作品。見る人の印象にも残る、作品としての強度がある。

【神戸新聞社賞】 《song #5》
技法や作品にこめた作者の主張は伝わりづらいが、皆の気を引く作品。もう少し、作品を解釈するためのヒントがあればより良いのでは。

【芸術文化協会賞】 《実物大立体鳥凧》
目に付く作品。プロダクトデザインの観点からすると、もう少しデフォルメして商品化についての検討もほしい。構造をよく考えてある作品だが、プレゼンテーションの仕方が惜しく本来の良さが伝わり辛い。